

個別・最適化された学習で高校でも通用する力を

—英作文指導と発音指導を通して—

江澤 隆輔

はじめに

大学入試制度が揺れる中、中学校教員としてなにができるかを考えたとき、「高校進学後も通用する英語力をつけたい」と考え、特に英作文指導と発音指導に力を入れて実践している。中学3年間を見通した英作文指導と、フォニックスを取り入れた学習初期段階における発音指導について、取り組みを紹介したい。

1. 多忙が故の自転車操業授業

2016年に文部科学省が実施した教員の勤務実態調査で、学校の激務が改めて明らかになった。12時間近くの「平均」在校時間は、過労死ラインに迫る数字での働き方をしていることを示しており、特に中学校教員については多くの教員が過労死ラインを超えて勤務しているというデータもある。年々積み重なる業務、新たに打ち出される「〇〇教育」という名の下での指導、保護者対応や教材研究等、教師の仕事には枚挙に暇がない。学校の働き方改革に関する書籍を複数出版しているが、学校の現場を見ると、激務・多忙と言わざるを得ない。そんな中で、数年前までの私はどうしても「自転車操業」的な授業をしがちであった。部活指導や保護者対応などに追われ、十分な教材研究や教材開発ができないまま授業にのぞむこともしばしばあった。しかし現在は、今回紹介するような英作文指導と発音指導で、最適化された個別学習による働き方改革ができている。同僚の英語科教員と作成した教材などを使って指導を行い、同僚の在校時間・作業時間は月を追うごとに減っていった。まさに、学習の個別化と働き方改革を同時に成し遂げているのである。さらには、この実践で指導した生徒たちに「高校でも役に立った力は？」と聞くと、迷わずこの2つを挙げてくれる。今回はその実践をぜひ紹介したいと思う。

2. 英作文で高校に通用する生徒を育てる手立て

中学校で10年以上英作文を指導していくうえで感じていたことが、「生徒たちはライティングの努力を重ねていったん力をつけてしまえば、なかなかそのライティング力は落ちてこない」ということだった。英語の勉強を始めたばかりの頃は数文の英文しか書くことができなくても、とにかく数多くの英作文を書き上げることで力はつき、その力は落ちない。

しかしながら、当時の授業マネジメント上、定期テスト前に数問の英作文に取り組むだけで、生徒のライティング力を伸ばすことができないのが現状だった。そこで、他の英語科教員と協力して、「英作文問題集」という学校独自の問題集をつくった。各学年の文法シラバスを振り返って、どの学年のどの時期にどんな英文法を学習し、どんな語彙力をつけていくのか、5名の英語科教員で春休みの1週間をかけてすべて書き上げた。そして、それを手がかりに各学年100ページを超える学校独自の「英作文問題集」をつくり上げた。冊子になっている自分専用の問題集が生徒一人ひとりに用意され、生徒たちは今まで「どのくらいライティングを積み上げてきたのか」、「次の定期テストまでにどのようなライティングを積み上げていくのか」、「どの時期にどのあたりまで力を伸ばすべきなのか」を見える化することができた。また、過去の卒業生のライティング作品も問題集の中に取り入れた。詳細は後述するが、今現在でもこのページは好評である。

このように、英語科全員がかなりの労力を投入してこの「英作文問題集」をつくり上げたのには、どの英語科教員にも共通したある思いがあった。それは、「生徒たちが中学校3年間を通してまとまった英語の文章を書き上げる機会が少なすぎる」という思いである。それまでの英語科の授業システムでは、教科書の読み取りや文法の指導に時間を取りすぎていて、生徒の自由な発想や、中学生らしい思い・意

見がうかがえるような英語の文章を書かせることができないでいた。定期テストや高校入試には必ず英作文に関する問題が出題されるにもかかわらず、テスト前に場当たりの英作文を指導してしまっていた。今思えば、当時の生徒たちは「英語が苦手・嫌いだから英作文を書かない」わけではなく、単純に「英文を書く機会が少なすぎて、書きたい思いはあっても、どう書いたらよいかかわからない」状態だった。

学校現場は、「超」がつくほど忙しく、相当高い実践の意識を持っておかないと、日々の業務に忙殺され、落ち着いて生徒の学力向上について考える時間がない。そこで、3年生の3月に実施される県立高校入試や私立入試を乗り切るために、どの時点でどこまで力をつけておくべきか、英語科教員で落ち着いて共有する必要がある(できれば年度が始まるまでに)。また、中学生にとっての大きなテスト(中間テスト・期末テスト)は年間5回あるので、学年を5つに分けて、どの期間にどんな文法を学習して、どの期間までにどのくらいの力をつけておかないといけなくて、どの期間にどんな単語を勉強していくのか、すべて洗い出して表にした。気候が安定してクラス・学年も落ち着きを見せる9月から1月までを「学習充実期」とし、多くのお題を課す。1年生の4月から6月の間だけは、英語学習の初心者でありとてもデリケートな時期なので、英作文を宿題として課すことはしない。また、当然だが、その期間に取り組んだテーマの中から、定期テストのライティングを出題する。この工夫を生徒にとって「見える化」するために、「英作文問題集」のページ左上に「〇年〇〇テスト」のように明記することで、生徒にとってはより取り組みやすくなった。

以上のように、3年間を合計15の期間(1年生の学習初期を抜くと14)に分け、それぞれでどのくらいの力を生徒につけさせるのかイメージして「英作文問題集」のお題を決めていった。学校には1年間を通して、様々な行事がある。それらを英語の授業と絡めることで、テーマが生徒にとって身近なものになると考え、自作の「英作文問題集」の中に学校行事に関するお題を取り入れた。例えば、3年生の6月には修学旅行がある。これを英語の授業にも活かすべきだと考え、修学旅行から帰ってきた週に、「英作文問題集」の中で「修学旅行の3日間、どん

なことをして、どんなことを考えたか教えてください」というテーマで英作文をさせる。クラスメイトと大いに楽しんだ思い出があるので、生き生きとした英語表現をするようになった。

また、同じように各学年の遠足や文化祭、校外学習の時期を年度当初に「英作文問題集」の提出時期に反映させた。そうすることで、生徒にとって身近でかつ普段体験できないようなことを英語で表現しようとする手がかりとなった。「生徒の身近な話題」「生徒にとって楽しい思い出になっていること」を英作文のテーマとすることが有効な手法であるという思いは現在も変わらない。無味乾燥な話題をテーマとした英作文の提出率よりも、上記のようなテーマで取り組んだときの提出率のほうが圧倒的に高いからである。そして、中学校3年間での行事や取り組みはほぼ毎年変わらないので、いったん「英作文問題集」に収録してしまえば、次年度からの英語教員の業務削減・効率化にもつながる。

しかし、これだけの工夫を凝らしても、英語が苦手な生徒・低学力層の生徒にとっては、英文をいくつも書くことは難しいものである。そこで、問題集の最初のページには、とにかくわかりやすく英文を書く方法を記載した。できるだけ「主語」や「動詞」といった文法的な用語は使わずに、「誰が」「誰は」や「どうする」などと置き換えて、わかりやすく記載した。また、「意見文」と呼ばれる、論理的に英文を書き上げる方法も冊子の最初に記載した。英語が苦手な生徒も、わからなくなったらここに帰ってくればなんとか英文を書くことができるように工夫したのである。

さらに、この「英作文問題集」の中には、ところどころ先輩の作品をそのまま載せている。ねらいは2つあり、1つ目は「先輩が書いた優秀な英作文を読むことで、モチベーションを上げること」だ。「こんな風に書きたいな」とか、「こんなにたくさん英作文を書けていてすごい!」とか、「こんなに長い英文を書けていて、たくさん勉強したんだな」という気持ちを持ってほしいという思いがある。2つ目は、「先輩の英作文を見て、先輩も間違いを繰り返しながら力をつけていったことを知る」ことだ。優秀なライティング作品は多数記載しているが、間違えて直されている作品もわざと記載している。そうすることで、「間違いは普通である」「間違えて当

然」と思ってくれるだろう。生徒の中には、「間違えたら恥ずかしい」と思っている生徒もいる。そういった生徒には、たくさん直されている先輩の英作文を見て、「間違いを繰り返しながら上手になっていく」と感じ取ってほしいと思っている。

この「英作文問題集」ではあくまで「10文以上」の英作文を書いてくることを目標としている。特に、1年生の2学期頃までに「英作文はたくさん書くもの」という意識づけをすると、後々の指導が減って業務改善につながる。さらに、書けば書くほど力が伸びていくものなので、たくさん書くものだという意識を持たせてしまうと、その後の伸びが違う。また、一度英作文を書いて先生に提出しただけでは、絶対にライティングの力は伸びない。書き直しをさせて、もう一度生徒の英語で書き直す、清書することで力は伸びるのだ。

3. 自律を育てる添削

「生徒の自主性や自律を育てたい」という思いから、1回目の提出時に「あえて正答を教えない」という取り組みを行っている。先生が生徒の英作文に正答を書くことが生徒の勉強になることはなく、先生の「間違い探し」になってしまうと考えているからだ。正答が書き込まれた英作文をそのまま書き直すと、生徒の思考は停止し、単なる書き写しの時間になってしまうと考えている。現に、私がそういった指導をしていたときは、生徒のライティングの伸びは少なく、教師ばかりが苦勞して、肝心の生徒の学力は伸びないということがあった。生徒たちは間違えた箇所や個数のみが示された英作文を見て、どこが間違っているのか考え、調べて、書き直していく。この手法は、いい英作文を完成させるために一見遠回りのように思えるが、生徒の英語力の伸びは大きい。「またこのミスをしてしまった」とか「ミスはどこにあるのだろうか？」と考えるからだ。教師が正答を書き込んでやるのは、2回目のライティングである「清書」の段階でいいのだ。

こうして、いったん突き放すような手法を取って、自律を育てていった。今、この手法を取っていた3年間を振り返ると、生徒たちはとても苦勞したと思う。ミスの個数などで返却された自身の英作文を見て、書き直さなければならぬからである。それでも結果として、3年間この方法で指導された生徒たちは、

卒業直前に受検した資格・検定試験のライティング部門でとても高いスコアを記録することになった。

具体的には、英作文の添削時には「答えを教えない」代わりに、「ヒントを教えて」いる。どのように生徒に「ヒントを教えて」いたのか、実際の生徒のミスを用いて紹介したい。生徒が英作文を書いてきてスペルミスを見つけたときは、該当する単語に下線を引いて、その下に「ス」とだけ書く。例えば、make という単語を“meik”と書いていた場合、meik の下に線を引いて、「ス」と書く。これにより、生徒はスペルミスをしていることだけ知らされるので、教科書や辞書を引いて自分で間違いを直すことになる。また、語順がバラバラなときは、文全体に破線を引き、「??」と書くようにしている。「英作文問題集」の最初のページに語順一覧表をつけているので、生徒は添削を受けた英作文を見ながら、そのページをいつでも参照できる。単語が足りないときもある。例えば、生徒はよく“I like talking my friends.”といった英文を書いてくる。この場合、talking と my の間に「^1」とだけ書く。単語が2つ足りない場合は「^2」、3つ足りない場合は「^3」とだけ書いて、生徒の自学を促す。「この単語よりもこっちの単語のほうがナチュラルだなあ」というときもよくある。それをすぐに先生が直してしまうと、「なぜこの単語のほうがナチュラルなのか、適しているのか」を生徒は考えるようにならない。そこで、該当する単語に下線を引いて「別」と書く。

よくある間違いの添削方法を紹介したが、生徒の実態に合わせることはとても大切である。私は上記のようなやり方は、英語が得意・好きな生徒、または英語の点数が平均付近の生徒にのみ使用していた。英語が苦手で点数もあまりよくない生徒に対しては、モチベーションの問題もあるので、すべて添削して答えを教えていた。そのあたりは生徒の実態に応じて…だと思う。また、上記のような手法を取っていくことは、その目的と一緒に学期のはじめに生徒に話をしていく。説明もなく添削のやり方が変わってしまったら、生徒たちは戸惑うだろう。さらに、「こう書かれていたらこういうミスをしているって合図ね」という「記号一覧」も表にして配布すると有効だろう。ちなみに、このように「答えを教えずヒントだけ教える」英作文の添削方法は、圧倒的に時短になる。

4. フォニックスで英語学習初期段階をサポート

残念ながら、例えば“school”という単語を「なぜスクールと読むのか」指導されないまま、「書いて覚えなさい」という乱暴な指導がある。

そこで私は、中学1年生が入学してきて2ヶ月間は基本的に音声の指導をし、教科書を使わずにフォニックスの指導をするようにしている。簡単な「文字と音とのつながりのルール」(フォニックス)を知っていれば、中学校で学習する多くの単語を初見で読むことが可能である。初見である程度の数の単語を読めるという状態をつくっておけば、生徒は音読活動に自信を持って取り組むことができるし、教師は発音指導が短くて済むので、浮いた時間を他の活動に充てることもできる。

フォニックスルールの中から、私が生徒に教えているルールは5つの代表的なものばかりで、子音・母音・二重子音・二重母音・マジック e である。授業では、「アルファベットは単語の中に入ると、1つ1つに『仕事』(仕事読み)があるんだよ」と表現し、母音(aiueo)以外のアルファベット、すなわち子音の発音を一人ひとり個別にチェックするなどしてしっかりと学習させる。二重子音や二重母音は基本的には「gh」「th」「ea」などと書いた「フォニックスカルタ」で指導している。色分けされたカルタを8セット作成し、4名1グループになってカルタを取り合う。使い方は様々だが、教員が発音した単語の中に含まれるカルタを取り合ってもいいだろう。マジック e の指導は、タイムアタックを行っている。マジック e が使われている単語を多く用意し、制限時間内に読めるように練習する。

従来のように単語1つ1つの読み方を教えていくのではなく、「なぜその英単語はそういう発音になるのか」を考えて、フォニックスでひも解いて指導していくことで、劇的に単語学習に関する負担を減らすことができる。

中学校に進級してきたからといって、慌てて文字指導に入る必要はなく、まずはフォニックスを中心とした音声から指導していき、英文を書いていくうえで細かなルールはその後に回す。私は上記の内容を、入学してきた中学1年生の4月から2ヶ月近くをかけて、徹底的に指導するようにし、定期テストは音声中心の作問(約8割がリスニングによるフォニックス関係の問題)とする。その英語学習初期段階の2ヶ月

近くは教科書をほとんど開かないことになるが、生徒は2ヶ月でかなりの数の単語を自力で読めるようになっているので、その後の進度に全く影響はない。

私たち日本語話者の日本語習得を思い出してみると、「50音表」を必ず成長のどこかで練習する。「か」と「い」と「ま」という3文字を読めることで、「かいま」だけではなく、「かい」と「いま」を同時に読めるようになる。この「英語版50音表」に当たるのが「フォニックス」であると考えている。まずは文字と音とのつながり(フォニックス)を生徒に指導し、その後の単語学習の負担を軽くさせ、この知識を高校でも使えるように指導していく。もちろん、2ヶ月という短い期間ですべてを教えることは不可能に近いので、その後の3年間をスパイラルに指導していく必要があるが、そこで培われた文字と音とを結びつける力は、高校でも活かされ、卒業生にはよく「フォニックス」を最初に勉強しておいてよかったと言われる。おそらくこの文字と音とのつながりの部分をあいまいに指導したまま中学校での学習を終え、生徒は高校での発音学習に苦勞する。また、高校でも大量の単語を覚えていく必要があり、新出単語のたびに発音を確認していたら、時間はいくらあっても足りないと感じるだろう。そこで、中学校で文字と音とのつながりをしっかり指導し、高校でも通用する力を培っている。卒業生は、「ある程度初見で英単語を読める」ことで、他の教科に時間を回したり、さらに英語の別の技能の練習をしたりにできているようだ。

5. まとめ

以上、英作文の視点と文字と音との視点から高校でも通用する力をつけようと日々実践している。いずれも卒業生から「どちらも力をつけておいてよかった」と言われており、高校での授業で活かされているようだ。

この2本の柱でライティングとスピーキングの技能のトレーニングを確立し、生徒たちを伸ばすシステムができあがった。今後は残りの2技能であるリスニングとリーディングの研究に取り組み、さらに実践を積み重ねていきたいと思っている。